

ゆだねられているものを守る

今日、与えられている手紙のなかで、ペテロは教会という群れのなかでの秩序にふれています。かんたんというと組織の中の上下関係ですが、教会のそれは一般社会のものとは異なっていることが読み取れます。わたしたちの模範となられたキリスト・イエスご自身が、人の子は仕えられるためではなく、仕えるために来たと語られ、その通りに生き抜かれました。世界の中心に座る王が、世界のために進んで命を差し出す方であった。そしてその動機はわたしたちに対する愛と憐れみでした。ですから、この十字架のキリストを主と仰いで、その御足の後を追って生きる者は「強制されてではなく、みずから進んで」仕えるのですし、その動機は利得によるものではなく、権威を振りかざして押さえつけるのでもない。すべてのことを、キリストを模範として生きるように招かれる。神の霊に導かれて信仰によって人格を形作ることが求められます。

教会とは日本語では「教える会」と書きますね。勉強好きの日本人らしいネーミングだと思いますが、新約聖書に使われているギリシア語の意味は「主に召し集められた群れ」です。羊飼いに呼び集められ、守られる羊の群れ、だから群れのリーダーを牧師といいますし、教会でなされる霊的なケアのことを牧会と呼びます。教会は基本的に学校のように、体や知能の発達段階にあわせて小学校1年から6年までのように段階わけはしていません。義務教育期間は年齢で輪切りにされて集団で送り出されます。大学を卒業する時点では大体22歳で揃えられている。スーパーマーケットで売られているきゅうりや大根のようにサイズも大きさも規格が整えられています。しかし教会は主に呼び出された者たちの集まりによって群れが形づくられま

すので、老若男女、さまざまな者がいます。その群れのなかで指導者として立てられるのが長老です。1 節に「さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます」とありますように、ペテロは十二使徒のひとりですが、復活の主イエスが「わたしの羊の世話をしなさい」「わたしの羊を飼いなさい」と託された後は、この群れのなかで長老という働きを担う者ともなりました。そして、それは小アジアの各地に散らされて仮住まいをしているキリストに選ばれた者たちの群れにおいてもおなじで、団体の責任者として長老たちが立てられていた。いうならば今日の教会につながる役割が整えられていることがわかります。わたしたちの教会では長老という役職名は使わずに、役員と呼んでいますけれども、かつてひとりだけ名誉長老とされている教会員が半田教会にもおられました。それは穂積圭吾さんという戦前から戦後の教会を支え続けた方、この半田教会が柘町に移る前、ご自身のお宅を開放してお座敷教会としておられた方に贈られています。教会は年長者を敬いますが、年功序列の組織ではありません。教会生活の長い短いよりも、深さ浅さが問われるでしょう。わたしたちから問われるのではなくて、神さまから。神の愛への応答の仕方が問われる。それゆえに幼子から教えられることもありますし、召し集められた兄弟姉妹から信仰のありよう、信仰にもとづく判断、生き方などを分かち合います。ともに御言葉から学び、またその御言葉を歩みの灯火として生きた先達たちに導かれて歩んでいると言ってよい。そういう意味で、わたしたちは互いに互いを牧会しあい、支え合って歩んでいるということが出来るでしょう。

先日、葬儀がありました。わたしたちのよく知る姉妹です。

キリスト教の葬儀では、神さまから貸し与えられた時間としての命のなかで、その人がどう生きたか。具体的にその人の歩んだところに従って、与えられた召しにどう応えて生きたか。神を褒め称えたか、その人の証によって、恵み深い主の救いの出来事が明らかにされ、ともに主を褒め称えることが出来るならば感謝なことだと考えています。今日の週報には第4週ですのでこの月に召された教会員とこの1年のあいだに召された方のお名前を載せて覚えています。わたしたちの信仰の先達、肉親であったり、信仰を育て、支えてくださった兄弟姉妹がそこに名前を記されている。これは天に名前の記載されている方々の写しのようなものです。原本というか、台帳は天の神のさま元であり、それをこうして週報に記載して、わたしたちの覚えとしているだけです。そしてそれはその人の生きた信仰の応答を思い起こし、よいものを受け継ぎたい。キリストの御足のあとを踏んで歩いていった方々を思い、わたしたちもそのあとに続きたい。道なきところに少しずつ刻まれた信仰をもって生きた人々の轍のあとに続きたい。そういう仕方で半田教会の信仰が培われてゆくのだと考えています。ゆだねられている者を守るという、今日、ペテロが長老に勧めているのは、託されている羊のケアですが、わたしたち一人ひとりが共々に証をする生活をして、このように神さまへの応答のありようを、信仰の遺産として分かち合う、これもわたしたちに委ねられている教会の信仰の継承、半田教会という群れが世に示すことの出来る証といえるでしょう。京野菜とか、加賀野菜といわれる品種があります。その地域ならではの野菜の変種といえますか、地域で大事に育てられ、食文化を担っているようなもの、赤味噌なんかもそうだと思いますが、人間に召しがあるように、その地域に立てられた教会にも独自の召し、神さまが特別に与えられた使

命があって、それに応えていくなかで示されてくるもの、実らされてくるものがある。今日、ポントス・ガラテヤ・フリギア・小アジア・ピディニアの各地に離散して仮住まいしている選ばれた人々に宛てた手紙の言葉を、こうしてわたしたちが一緒に読んで分かち合うのも、彼らが信仰的難民となつてなお、神を仰ぎ続けた姿勢、彼ら自身に与えられた課題に向き合った姿勢から示される信仰の力、希望が与える不屈の、折れない心、そうした善いものを受け継ぎ、御国を目指して生きる群れを、この 21 世紀の愛知の、知多半島の地で形作ってゆく。ここに天にある朽ちることも、萎むことも、汚れることもない復活という、死を超えた希望によって生かされる、この地上の損得勘定だけで生きているのではない不思議な群れを形作ってゆきたい。そういう冒険に、わたしたちキリスト者は召されている。そういうメッセージが手紙全体から励ましとして浮かび上がってきます。その教会のなかの上下関係は、キリストにならう。群れの中に立てられた信仰的なリーダーである長老たちは年齢順ではありませんし、性別も関係ありません。わたしたちの誰もがその職に召されている。神の選びによって召し出され、御言葉に応答して生きることによって、御言葉がわたしたちを作り変えてゆく。洗礼を受けることは、生まれながらの自分に死んで、わたしたちの自己中心性や、歪んだ自己愛からくる神なしの生き方に死んで、神の言葉によって生きることが出来るように、神の言葉そのものであるキリスト・イエスに結ばれて生きるものとなる儀式です。そして具体的に教会につながるための儀式です。そこには先に召された信仰の兄弟姉妹がいて、それは年齢や性別、国籍すらも超えた群れです。こうして神の子とされているということが、わたしたちの上書きされた現実となり、その人をキリスト者と呼ぶのです。先週の説教箇所で、

あなたがたのうえに降りかかる火のような試練を怪しんではない、というペテロの言葉に聴きました。苦難や迫害にあうことは御言葉に従うなかで必ず起きてくる。この世にあって、キリスト者として生きることは流れに逆らって上流を目指すのに似ています。膝下ならばまだ歩けますが、腰まで水に浸かったら流れの速さや足元の悪さで上流を目指してゆくのはたいへん難しく、危険になるものです。流されてしまう。しかし、そういう逆境や、苦難を通して、わたしたちは御言葉の力と出会う。病気になって薬の効き目を知るように、わたしたちをキリスト者として、信仰者として成熟させてゆくのは苦しみの恩寵にほかならないのです。このことは決して忘れてはならないし、恐れてもならない。試練を通して、わたしたちは神が生きておられることを知る。自分の弱さを、わたしたちは知っている。だから信仰を同じくする兄弟姉妹がこうして備えられているのです。また長老が御言葉を取り次ぎ、指し示す者として、祈りにおいてとりなす者として立てられているのです。今日もこうして御言葉がわたしの歩む道を照らす灯火として与えられます。さまざまな者たちが呼びかけられ、ここに集わしめられ、ひとつの食卓で養われる。その目的は違った歩幅で一緒に歩くこと、同じ方向を、御国を目指す群れであることを共に確認し、喜びをもって御国を目指すことです。そのために御言葉をとおして今日も霊の糧をいただき、御国の消息に生かされ、いよいよキリストを愛して歩む半田教会の群れのひとりとして背筋をのばして歩みたく願っております。

お祈りいたします。